

## トマトの皮

大唐静子

自分がしゃべった言葉が不意に現れることがある。何か特別な意味でもあるかのように、生々しく頭の中に再生される。真つ黒いスクリーンに白く浮かび上がった文字のように、その「語」のみがハッキリ頭に蘇るのである。今日はこれだった。

「トマトの皮がダメなんですよ。」

確かに私が話した言葉だ。それは間違いがない。でも誰に？何処で？いつ！

どんな文脈で……。全く分からない。焦る。何度も繰り返し言ってみる。一時間後だっただろうか、数時間経ったのかも知れない。おぼろげに見えてくる。……「母も私も、トマトの……」と続けたのだった。ごく最近だ。多分、今日のうち。しかし誰に会ったろう。母を話題に出せる人、とは？特別な人と会った覚えはない。日常のままだ。予約者も突然の来訪者もなく、今日は夫と、スーパーのレジでしか会話していないのと思う。

「ですよ。」と、敬語を使う人。そういう人に、今日ほんとに出会ったのだろうか。初めから、朝から思い出してみようと思う。

そうだ、今日は木曜日だった。実家から出勤してきたのだ。JRに乗った。牟岐線を降り、徳島駅から鳴門線に乗り換えた車内で、JR友のS君とMさんに会っていた。……思い出した！一回りほど年上の、Mさんとの会話だった。

朝食にはトマトを食べる、という話が出た。私も母も口にしたトマトの、最後まで残ってしまった薄い皮を噛みしめたときの感じがたまらなく嫌で、トマトは皮を剥いてでないと食べられなくて、と話したのだった。確か、Mさんもトマトの皮は苦手だと言っていた。

そうだった。朝出勤してきたことをすっかり忘れていた。誰にも会っていないはず、と思ったときは焦ったが、思い出せてよかった。ほんとうによかった。

状況が分からず、映像もなく、自分の発した言葉のみが浮かぶ状態は怖い。まるで真つ暗闇の中に立ちすくんでいるようだ。

これはもしや、認知症の初期症状ではあるまいか。病気が進むと、二四時間こういう状態になるのかもと思うと、恐怖が冷たく背中をのぼってきた。

今はまだ、記憶をたどって思い出せる。これまでの数回は全部つきとめられた。だが……。しかし、なぜにトマトの皮は残る？